

# DRGとは、DRGの沿革

## 1. DRGとは

医療資源の投入量の同質性という観点から診断名と処置・手術に基づいて患者を分類する。

## 2. DRGの沿革

1968年 エール大学でDRG研究を開始。

1978年 ニュージャージー州が病院の支払方式にDRGを利用。

1982年 ICD-9-GM (国際疾病分類第9版) をDRG用に改編。

1983年 メディケア(パートA) が病院の支払方式に DRG を利用(5年間かけて漸次導入)。

1986年 全米子ども病院協会 (NACHRI) が小児科版 DRGを開発。

1987年 エール大がDRGの合併症・併存疾患の定義を精緻化する。

1988年 ニューヨーク州がメディケア以外の患者を対象とした

DRG (All Patient-DRG) の導入を決定。

1990年 3MHIS社が AP-DRG, NACHRI-DRG, エール大学の精緻化作業を

統合化する形でAPR-DRG (All Patient Refinement-DRG) を開発。

1993年 いくつかの州が APR-DRG を使って病院のコスト及び

治療成果の比較研究を開始。

## ケースミックスとは

病院毎にコストは差があり、病院コストの違いは、

病院が対象としている患者のタイプに基づく。

患者のタイプをケースミックスと呼ぶ。

より複雑なケースミックスは病院のコストが高くなる。

DRGsは、ケースミックスの1つ。

DRGsは、臨床的及び経済的に同種類の患者を、同じカテゴリーに分類する。

従ってDRGsは、限りある医療資源を配分するための合理的で科学的な方法。

# ICDからDRGに転換する一連の流れ 1

1. まずカルテ記載事項がある。

<カルテの記載事項>

退院時サマリー(抜粋);

54歳男性。建設現場で作業中に階段から落ちて、救急車にて当院に搬送となった。患者は頭部に開放性骨折があり、脳挫傷を伴っていた。頭蓋骨骨折はデブリードマン施行の後に整復され、そのままICU入室となった。4日後には一般病棟へ移動となり、入院14日目退院となった。1週間後に再来院の予定である。

2. これをICD でコーディングすると次のようになる

① 診断名を米国 ICD - 9 - CM でコーディングした場合

・ 主要診断名 803.60 その他の頭蓋骨開放骨折、  
脳裂傷および脳挫傷を伴うもの、  
意識状態詳細不明

・ 二次診断名 E880.9 その他の階段またはステップ  
E849.3 工場の建物および敷地内

処置・手術コード1 02.02 頭蓋骨骨折骨片の挙上

## ICDからDRGに転換する一連の流れ 2

1. まずカルテ記載事項がある。

<カルテの記載事項>

退院時サマリー(抜粋):

54歳男性。建設現場で作業中に階段から落ちて、救急車にて当院に搬送となった。患者は頭部に開放性骨折があり、脳挫傷を伴っていた。頭蓋骨骨折はデブリードマン施行の後に整復され、そのままICU入室となった。4日後には一般病棟へ移動となり、入院14日目に退院となった。1週間後に再来院の予定である。

2. これをICD でコーディングすると次のようになる

② 診断名を ICD - 10 でコーディングした場合

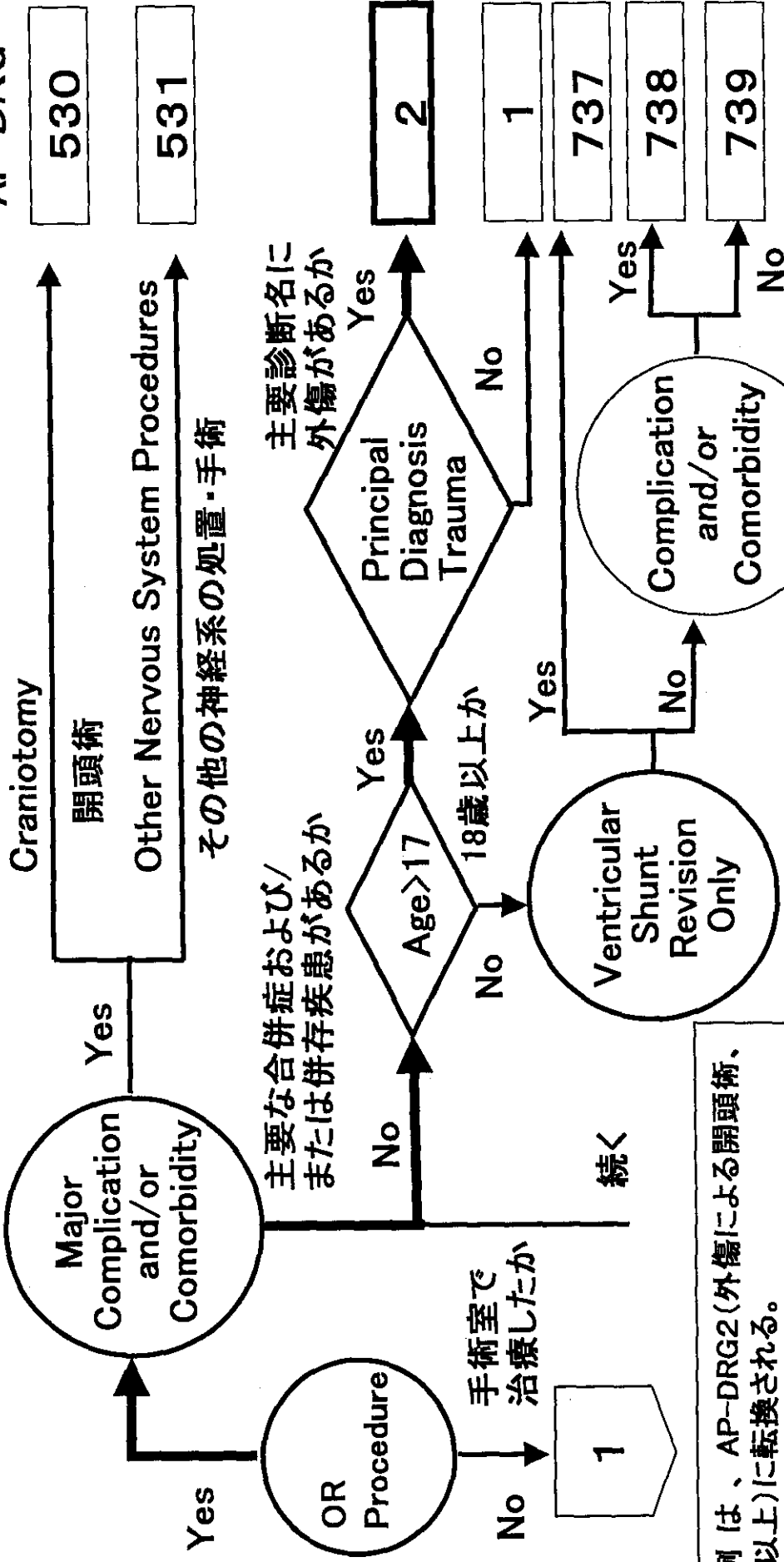
- ・ 主要診断名 S02.91 頭蓋骨および顔面骨の骨折、部位不明、開放性
- ・ 二次診断名 W10.62 階段およびステップからの転落およびその上での転倒  
建築現場、収入を得るための活動中

処置・手術コード1 02.02 頭蓋骨骨折骨片の挙上 ※1

※1 ICD-10は診断名のみのものであり処置・手術コードはないので、ここもICD-9-CM とする。

# ICDからDRGに転換する一連の流れ 4

□ MDC1分類(外科系入院)のフローチャート



脳室シャント修復術のみ

合併症および/または併存疾患があるか

この症例は、AP-DRG2(外傷による開頭術、年齢18歳以上)に転換される。  
 確認のためAP-DRG2に属するPDX(主要診断名)およびOR Procedure(処置・手術コード)の欄を見ると、PDXにはコード803.60が、OR Procedureにはコード02.02 がそれぞれ含まれており、このコーディングが正しいことがわかる。

# 病院経営効率化のための情報の標準化とシステムの開発

